

広西省における壬寅奇災とアメリカ救済遠征隊

土 肥 歩

はじめに

一九世紀末から二〇世紀初頭の広西省（現在の広西チワン族自治区）は会党や游勇による騒乱と、自然災害（以下、壬寅奇災と称す）に見舞われた。本稿では、キリスト教ミッション及び在広州アメリカ総領事館による災害救済活動が、キリスト教伝道や騒乱の推移に与えた影響を考察する。

そもそも、広西省の騒乱は、辛亥革命の前段階として発生した民衆蜂起と考えられ、研究者の多くはその発生原因、規模、推移に強い関心を示してきた。たとえば、古くは来新夏の研究⁽¹⁾によってその概要が示される一方、広東省の中山図書館は騒乱に関する日刊紙の関連記事を収集・整理した。こうしたなか、フランス領インドシナ連邦（以下、仏印と表記）と広西省の国境をまたいだ会党や游勇の活動と騒乱との関係が研究者の関心を集めるようになって

(2) なかでも、地方志、行政文書、そして口述資料を駆使した徐軻の研究は、騒乱の全体像を把握する上で欠かせない。(3) ただし、筆者が確認しうる限り、これら既存の研究は災害が騒乱の悪化に拍車をかけたことを指摘したものの、そのさなかに行われた救援活動が騒乱の推移にどのような影響を及ぼしたのかという点について、踏み込んだ考察を行ってこなかった。

この問題の解決策の一つとして、本稿は宣道会 (Christian and Missionary Alliance) の活動に着目する。同会に關しては、宣教師や中国人信者たちの業績紹介、もしくはキリスト教伝道の史実解明という観点からこれまで多くの文献が公刊されてきた。たとえば、中国語では宣道会の伝道活動に従事した羅腓力や梁家麟による編著や黄彩蓮の著作が、英語では宣道会宣教師のオールドフィールドによる著作やベッパリーによる伝記などがあり、いずれも壬寅奇災に対する救済活動に言及している。

ただし、本稿ではキリスト教伝道の歴史として論じられてきた先行研究の成果を参照しつつも、新たに二つの補足を加える。一つは、広西省に蔓延していた騒乱の実態を伝道活動の推移と関連付けることである。(5) もう一つは、宣教師たちの救済活動が、在広州アメリカ総領事ロバート・マクウェイドの協力を得て、国際的な救援活動に発展した事実を整理することである。このように、キリスト教伝道に関する文書や外交文書に依拠しつつ、上記二点を補足することで災害救済が騒乱の推移やキリスト教伝道に与えた影響を考察可能とする。

以上の問題関心に基づき、本稿は次のように議論を進める。まず、既存の研究や各種の資料から騒乱の実態を整理したうえで、壬寅奇災が混乱に拍車をかけた事実を確認する。続いて、現地の宣道会宣教師による救済活動や、

『クリスチャン・ヘラルド』誌からの寄付金を通じてマクウェイドが組織した「アメリカ救済遠征隊」による飢饉救済の様子を描き出す。そのうえで、飢饉救済が広西省における宣道会の伝道活動にどのような影響を及ぼしたのかを整理する。これと同時に、アメリカ国内で「人道主義的」と称賛された飢饉救済と、同時期に行われていた両広総督岑春煊による騒乱平定作戦との関係について考察を加える。

本稿の考察を通じて、壬寅奇災に対して行われた宣教師や外交官による人道支援が、中国側の介在を通じてその性質を変化させていく過程が明らかとなるだろう。

第1章 広西省における騒乱

阮朝ベトナムの宗主権をめぐる勃発した清仏戦争は、一八八五年四月の天津条約により停戦を迎えた（以下、本稿では全て陽暦を表記する）。このとき、両国間の取り決めで策定された国境防衛を担当する役職として「広西辺防督辦」が設置され、戦争で武功を挙げた蘇元春が着任した。⁽⁶⁾ 彼は戦後、広東、広西、湖南、湖北から集められた八〇營（一營は約五〇〇人）以上の兵士を除隊させ、一八八七年四月までに辺防部隊を二〇營と定めた。⁽⁷⁾ しかし、除隊兵士の多くは、故郷に戻ることなく、清越国境付近で略奪を繰り返すようになった。彼等は「游勇」「游匪」とよばれ、秘密結社（会党）や土匪と糾合して一大勢力となることすらあった（以下、本稿では游勇と表記する）。⁽⁸⁾

仏印当局も游勇の取締にあたったが、付近の密林に逃げ込んだ游勇に対して有効な措置を講じることができなかつた。そこで、一八九五年にフランス駐清公使オーギュスト・ジェラルと総理衙門は中越境界会巡章程を締結する。

この取り決めは、仏印当局は領内における会党と游勇の取締を強化し、龍州に駐在していた蘇元春がそれらを招撫するといふものであつた。⁽⁹⁾清仏双方の取り組みによって仏印領内の治安悪化には歯止めが掛けられたものの、中国側では游勇や会党を社会に復帰させる方法は十分に機能しなかつた。彼等の多くが商業活動に従事する術を身につけているわけでもなく、帰農させることもできなかった。しかし、かといつて再び仏印に舞い戻ることとも困難となり、さらには蘇の軍営に帰順した游勇への給与支払いが滞りがちになつていた。それゆゑ、帰順した游勇や会党の多くは武器を携帯したまま軍営を離脱し、再び略奪行為で生計を立てざるを得なくなつた。⁽¹⁰⁾

この章程をきっかけとして、清側の国境付近に位置する二地域で治安が悪化し始めた。一カ所は十万大山である。仏印の諒山から広東省の欽州西南部をまたぐこの山脈は、仏印を追われた会党や游勇の隠れ家となつた。同時に、開港場となつていた北海の経済的衰退によつて生み出された流民がこれに加わることになつた。⁽¹¹⁾もう一カ所は、貴州省・雲南省・広西省の省境である。たとえば、一八九七年四月には広西省凌雲県の楽里でフランス人宣教師マゼルとその従者二名が殺害された事件には、仏印から中国領内に流入した会党首領の游維翰が関与したとされる。⁽¹²⁾

こうした中で、一九〇一年一月に清朝中央は蘇元春に湖北提督異動を命じた。その成果の是非はともかくとしても、蘇は仏印から逃れてきた会党や游勇を配下に加えることで治安維持に努めてきた。しかし、彼は異動に際して大量の兵士を除隊させたため、兵士たちは武器と弾薬を携帯したまま野に放たれた。⁽¹³⁾

游勇の存在を宣教師や外交官たちに知らしめるきっかけとなつたのは、一九〇二年二月に南寧府で発生した民衆暴動であつた。宣道会の宣教師で南寧に滞在していたマーティン・ランデイスと地方志の記述から、その経緯は以

下のとおりまとめられる。まず、一九〇〇年に南寧府周辺の治安の悪化を懸念した南寧知府惠榮と宣化知県周頌声は国防総局を結成した。しかし、將軍馬盛治による掃討作戦が激化し、周辺の農村では数多くの民衆が匪賊とともに殺害される⁽¹⁴⁾。そのため、一九〇一年二月ごろには、知府の交代を叫ぶ民衆の不满がランデイスの耳に届くようになった。そして、行政官に対して不満を募らせていた民衆と、蘇元春の湖北総督異動によって兵營を離れた游勇（ランデイスは約七〇〇人とする）が合流し、南寧府で大規模な暴動が発生したのである。城内で発生した略奪や戦闘を避けるために梧州に避難したランデイスはその後の経緯を記録していないが、この暴動は三月中旬には鎮圧されたとされる⁽¹⁶⁾。

一九六〇年代に出版された文献は、この暴動を率いたリーダー一八人のうち八人が、清仏戦争に従軍した経験をもつ游勇だったとしている⁽¹⁷⁾。さらに、アメリカの外交文書は南寧暴動の詳細に触れていないものの、アメリカ駐清公使コンガーは蘇元春が「一万人以上の兵士」を除隊させたことが治安悪化につながったと認識していた⁽¹⁸⁾。そのため、ランデイスの証言は信憑性が高い。

一八九五年の中越境界会巡章程の締結以降、中国領内に大量の会党と游勇が流入した。さらに蘇元春の異動によって大量の游勇が生み出された。南寧暴動は、地方政府への不信感と游勇の増加という二重の要因によって発生したといえる。そして、この混乱に拍車を掛けたのが、本稿で取り上げる壬寅奇災である。

第2章 壬寅奇災の発生

游勇や会党による反乱が深刻化するなか、広西省の梧州府・潯州府・柳州府・南寧府は、一九〇一年から一九〇三年にかけて干ばつと洪水に見舞われた。史上、この自然災害は壬寅奇災と称される。

梧州では、一九〇一年の秋に長期にわたる干ばつによって作物が失われ、続く一九〇二年春も不作に見舞われた。六月初旬から雨が降り始めたものの、今度はこの降雨が六〇年に一度の大洪水をもたらしことになった。⁽¹⁹⁾干ばつと洪水によって農作業を続けられなくなった梧州府付近の農民たちは、一九〇二年冬には畜牛、ニワトリ、豚などの家畜を、一九〇三年春には屋根瓦や寝具などの家財を売却して生活した。それでも生活に困窮した農民たちの一部は、女兒の人身販売に手を染めたという。⁽²⁰⁾一方、貴州では、一九〇二年五月一日から八月一七日まで雨が降らなかったが、翌日から降り出した雨は一〇月二〇日まで約二ヵ月間続いた。この雨によって穀物は水浸しになり、ことごとく収穫できなくなってしまった。一九〇三年春には、上石龍壩で米穀一斤が通常価格の五倍にあたる一〇〇文にまで高騰した。各地の市場町の米穀は瞬く間に払底し、代替食料となる植物類もすぐに食べ尽くされてしまった。生活に窮した人々は子どもたちを売り、市場では人身売買が盛んに行われた。⁽²¹⁾梧州府と貴州以外でも、邕寧県では一九〇二年に大干ばつによってやはり米穀一斤が一〇〇文にまで高騰したことが記録されている。⁽²²⁾柳城県では一九〇二年に大規模な干ばつの中に、六月には大雨によって民居が水没し、被害額は数百万元にのぼった。そして、秋には疫病が流行した。⁽²³⁾このように、広西省の東部・北部・南部における大規模な干ばつ・洪水被害が各種資

料から確認できる。

壬寅奇災の被災者数について、宣道会の宣教師フイーは一九〇三年五月の段階で、桂平県で約一五万人、南寧府で約二万五〇〇〇人、宣化県で約四万八〇〇〇人、そして貴県では約一四万二八〇〇人とする⁽²⁴⁾。一方、死亡者数については、貴県で「餓死、病死するものが数千あまり」とされていることから、被災した各地域でこれに相当する餓死者や病死者が発生していたと推測される⁽²⁵⁾。

各地を襲った壬寅奇災は騒乱を誘発した。たとえば、一九〇二年秋には会党が飢饉被災者と游勇を糾合し、泗城と西隆州（現在の凌云県付近）でそれぞれ武装蜂起している⁽²⁶⁾。广西巡撫の王之春が「百万人あまりの被災者が救済を待っていて、巨款を投じた応急措置がないなら、飢えは恐怖に変わり、ぐるになって潜伏し、反乱を称するでしよう⁽²⁷⁾」と発言しているのは、こうした情勢を踏まえたうえで、壬寅奇災が騒乱に及ぼす影響を憂慮していたことを示している。

第3章 宣道会宣教師による救済活動

広西省各地を襲った災害に対して最初期に救済活動に着手したのは、広西省で活動していた宣道会の宣教師たちである。宣道会の創設者であるアルバート・シンブソンは世界各地の伝道地をめぐる旅行の一環として中国南部を訪問し、この地域での伝道活動を発案した。彼はアメリカに帰国後、すぐに雑誌を通じて伝道スタッフを募集した。これに応じたリーブス夫妻は一八九二年一〇月二五日にアメリカを出発し、広州の沙面租界に到着した。しかし、

当時の広西省では桂平県にあるアメリカ長老会ミッシヨンの病院や、梧州にある南部バプティスト・ミッシヨンのステーションが三度にわたって略奪を受けるなど、キリスト教伝道には困難が伴った。そのため、この当時はリース夫妻が三ヶ月間にわたって広西省全土の視察旅行を行うのみであった。この後、シンプソンの呼びかけにに応じたスタッフが一九九四年に派遣されたことで、宣道会の伝道事業は本格化する。⁽²⁸⁾

一八九七年の中英演繹条約によって梧州が開港場になると、宣道会の宣教師たちはその前後から広西省各地でステーションの開設に着手した。一九〇三年の時点では、二六人の外国人宣教師と約二〇人の現地人助手が梧州を拠点として、藤県、桂平県、貴県東南部にある東津、そして南寧で教育活動や礼拝堂での説教を通じたキリスト教伝道に従事していた。⁽²⁹⁾

壬寅奇災による飢饉被害が深刻化すると、フイー夫妻は中国人信者とともに一九〇三年初頭から桂平県の礼拝堂を開放して救済活動に着手した。説教を行った後に食糧を提供するやり方で、三月九日には三五〇人が礼拝堂を訪れたという。このとき、桂平県の行政官から「皇帝の廟」の使用が認められたため、その施設を利用して一日一回の食糧配給が行われるようになった。その結果、宣教師たちは三月一二日には被災者一〇二三人に対して、一四日には一二三八人に対して、それぞれ粥を提供した。⁽³⁰⁾この後、「皇帝の廟」が手狭になると、知県は約五万人が収容可能な孔子廟の広場の使用を認めた。⁽³¹⁾

救済活動が始まった当初は、現地の宣教師たちが私費を投じて米穀を購入し、被災者に配布していた。その後、彼等の資金が底をつくると、梧州の外国人コミュニティやほかのミッシヨンに寄付が呼びかけられたようである。し

かし、いくら支援の輪が広がっても、広西省の宣道会宣教師の救済活動には限界があった。一九〇三年秋の年次報告によれば、フイーらの活動によって何千人もの飢民に食糧を提供したとしながらも、「少なくとも三万人以上の男性、女性、そして子どもたちがそうした「人身売買などの」悲劇の犠牲になった」としており、被害の深刻さを憂慮している。⁽³²⁾そのため、梧州に滞在していた宣道会宣教師アイザック・ヘスは、英領香港の総督ブレイクと在広州アメリカ総領事マクウェイドに面会し、飢饉についての情報を提供した。⁽³³⁾

もちろん、中国の行政官たちは「荒政」を実施することで民衆の救済に乗り出していた。王之春は清朝中央や釐金収入を工面する、富裕層から義援金（賑捐）を募る、仏印と香港から米穀を輸入して民衆に配布するなどの活動を行っていた。⁽³⁴⁾しかし、王は被災地が広域に及んだために食料庫が底をつき、軍事作戦に必要な資金も欠乏しているとす。そのうえで、行政官や紳士による救済活動では被災者全てを救うことができないため、広東省の善堂（慈善結社）に米穀の輸送や配布を要請すると同時に、香港の東華医院や善堂にもこの事実を転送してほしい、と広東省の行政官に依頼している。⁽³⁵⁾

このように、宣教師たちによる救済活動と広西省の行政官による「荒政」の限界が露呈すると、宣教師や現地行政官は広東省や香港に支援を求めた。本稿では、マクウェイドがアメリカ国内を巻き込んで展開した国際的な救済活動に着目する。

第4章 『クリスチャン・ヘラルド』誌による募金活動

マクウェイドは事態の緊急性に鑑み、広東省の外国人コミュニティやアメリカ本国にむけて飢饉救済の寄付を呼びかけた。これに対して、キリスト教系総合雑誌『クリスチャン・ヘラルド』誌はアメリカ国内で募金活動を展開した。これに関連して、同誌は過去にも陝西省の自然災害に対して募金活動を行っていたことを確認してみたい。以下、史紅帥の論文を参考にその概要をまとめる。

陝西省では一八九八年から一九〇一年にかけての干ばつによって飢饉が発生していた。アメリカ国内では、陝西省では一九〇一年一月の時点で約五〇〇万人が飢えに苦しんでいると報道されていた。このため、『クリスチャン・ヘラルド』誌の主編ルイス・クロップシュ(Louis Klopsch)は一九〇一年四月に同誌社説で陝西省の飢饉に対する寄付を訴えた。そして、同誌には直隸総督の李鴻章や慶親王が駐清公使コンガーに提出した飢饉の報告書や、コンガー自身による寄付呼びかけの文章が掲載された。これらを読んだアメリカ各地の読者によって、『クリスチャン・ヘラルド』誌に義援金が寄せられ、最終的には約六万米ドルに達した。⁽³⁶⁾

一方、クロップシュは中国北部で活動する宣教師五人を選出して「クリスチャン・ヘラルド海外救済委員会」を天津に設置した。この委員会は、アメリカから送られてきた義援金の管理、被災地における救済組織の整備、被災地への義援金送金、宣教師の派遣などを担当した。⁽³⁷⁾ 史の研究は、同委員会のメンバーの一人であり、陝西省に滞在して直接救済活動に従事したバプテイス脱派宣教師モア・ダンカンに着目している。ダンカンは、一九〇一年八月

二六日から一月二四日までの間、現地の宣教師、現地人信者、そして地方の行政官による救済委員会を整備し、三原や臨潼などの被災民に対して食糧購入に必要な現金を支給した。この結果、災害救済活動は行政官や民衆が抱いていたキリスト教伝道に対する敵意を緩和したばかりでなく、救済活動の対象地域における改宗者の増加にも寄与した、と史は指摘する。⁽³⁸⁾ 壬寅奇災に対する募金活動も、陝西省のそれをほぼ踏襲したものと見えるだろう。

同誌はまず、窮状を訴えるマクウエイドや宣道会宣教師の手紙を誌面に掲載し、読者に寄付を呼びかけた。このとき、広西省における災害の窮状で強調されたのは、貧困にあえぐ家長が食糧を購入するために子供や女性を身売りに出した事実であり、さらには男児よりも女児が売却の対象になっているという男女間の格差でもあった。⁽³⁹⁾ カトリック教会の募金活動について論じたヘンリエッタ・ハリソンは、カトリック教会の神父が貧困から幼児を救い出すという「ドラマチックな救い」に心動かされたヨーロッパの中流家庭が、カトリック教会の孤児支援組織に資金を提供したと指摘している。⁽⁴⁰⁾ 『クリスチャン・ヘラルド』誌が呼びかけた募金運動も、婦女子の売買や男女間の格差に訴えかけることで多くの人々の関心を集めることが目指されていたと思われる。

全米の読者が『クリスチャン・ヘラルド』誌に寄付金を寄せると、同誌関係者は国務省経由で在広州アメリカ総領事館に三回にわたって寄付金を送った。一九〇四年四月の会計報告に依拠すれば、総領事マクウエイドは一九〇三年五月八日に約五〇〇〇米ドル、六月六日に約一万米ドル、そして七月一日に約一万米ドル、すなわち合計約二万五〇〇〇米ドルを受領した。これに加えて、中国で活動する外交官や宣教師などによる個人名義の寄付金もマクウエイドの元に寄せられた。これらの寄付金は現地通貨の銀元に換算され、在広州アメリカ総領事が受け取った

寄付金総額は最終的に六万二五三二元九九毫となった。⁽⁴¹⁾

第5章 アメリカ救済遠征隊

寄付金は国務省を通じて在広州アメリカ総領事に送られ、現地で米穀などの食糧や活動に必要な物品の購入費用に充てられたと思われる。そして、この米穀を運搬・配布するために、マクウエイドは「アメリカ救済遠征隊 (American Relief Expedition 以下、遠征隊と表記)」を三回にわたって派遣した。

この遠征隊は、アメリカ宣道会ミッション、アメリカ長老会ミッション、アメリカ聖書協会、イギリスウエスレー派ミッション、イギリス聖書協会、ニュージールランド長老会ミッション、アメリカ連合ブレザレン・ミッション、マカオの嶺南学堂の八団体に所属する宣教師および教育関係者で構成された。⁽⁴²⁾

まず、第一次遠征隊は五月一六日にマクウエイドが一八〇〇ピクル (約一〇万八〇〇〇キログラム。以下、一ピクルを約六〇キログラムに換算する) の米穀を積載した三隻の平底はしけを梧州に派遣したことに端を発する。この時、両広総督の徳寿が平底はしけが西江を遡上するのに必要な汽船を手配し、さらには梧州に運搬された物資の積み替えを王之春に命じていた。⁽⁴³⁾ この遠征隊は、五月二〇日ごろから貴州城の城外東南に位置する市場町の橋墟と木格で、さらには五月三〇日から平南県で米穀の配給を始めた。第一次遠征隊の活動終了時期は確認できないが、少なくとも六月七日ごろまでは広西の被災地で物資の配給を行っていたようである。⁽⁴⁴⁾

続く第二次遠征隊は、六月二一日に広州を出発した。この時、アメリカの砲艦カヤオ号と中国の魚雷艇が六〇〇

○ピクル（約三六万キログラム）の米穀と二〇〇袋のアメリカ産小麦粉を積載した六隻の平底はしけを護衛し、被災地に向かった。この遠征隊の活動範囲は平南県、（平南県東部の）江口墟、桂平県、（桂平県南部の）下湾、（貴県の）大湾塘、Tseung Tsun（東津か）の六カ所に及んだ。そして、七月二日に平南県と大湾塘での活動を終了した。⁽⁴⁵⁾

第三次遠征隊は七月一六日に広州を出発し、やはり六〇〇〇ピクルの米穀を搭載した平底はしけを中国の砲艦が護衛しつつ、西江を遡上した。この遠征隊の活動範囲は、Tseung Tsun、平南、桂平の三カ所であった。第三次遠征隊の経緯については後述の通りであるが、遠征隊のリーダーである嶺南学堂の教員クランシー・ルイスは八月五日ごろに広州に帰着し、広西省での救済活動は終了した。⁽⁴⁶⁾ 三次にわたる遠征隊が配布した米穀の総重量は一万三八〇〇ピクル（約八二万八〇〇〇キログラム）にのぼった。⁽⁴⁷⁾

被災地における救済物資の配給はどのように行われたのか。ルイスによれば、物資は「一般的な配給」と呼ばれる方法を通じて配布された。これは、配給施設の門前で引換券を配布し、食糧を支給するというものであった。第一次遠征隊が開いた平南県の配給所では、この方法が採用された。これは「外国人にとっては最も簡単なやり方」であったが、群衆が押し寄せた場合には手の施しようがなくなるといふ欠点があった。事実、七月一三日には桂平県城内の配給所に四万人あまりの群衆が殺到して、子どもと女性二三人が圧死している。⁽⁴⁸⁾

では、救済遠征隊の食糧はどれくらいの人数に行き渡ったのか。カヤオ号に乗船していた海軍士官候補生のスターリングは、第一次遠征隊が運搬した一八〇〇ピクルの米穀で三万人に食糧を供給できるとしつつも、新しい集積場が設置されれば「少なくとも五万人」に供給できるとの見込みも示している。しかし、この計画が実行されたかは

不明である。⁽⁴⁹⁾一方、第二次遠征隊では平南県城で女性一人に対して一二オンス(約三四〇グラム)の米穀を配布し、健康状態に応じてその二倍から三倍の米穀を配給したとしている。⁽⁵⁰⁾後者の事例に基づけば、少なくとも第二次遠征隊が運搬した食糧は約百万人に行き渡った計算になる。⁽⁵¹⁾ただし、各被災地における米穀の配布実態についてはさらなる資料調査を待ちたい。

第6章 救済活動とキリスト教伝道

『クリスチャン・ヘラルド』誌の社説は広西省で行われた救済活動とキリスト教伝道を関連付けて、次のように述べた。一九〇一年に陝西省で救済活動が行われた結果、アメリカによる支援は福音の伝え手に対しての敵意を友情に変え、同時にキリスト教伝道のためのより良い足場を中国に確保する、という「二重の恩恵」を読者にもたらし、そして、一九〇三年も引き続き「二重の恩恵」がもたらされた。『クリスチャン・ヘラルド』誌は、マクウエイドの呼びかけに応じて救援資金を拠出し、広西省の宣教師たちは食糧配給に従事した。その食糧を積み込んだ船団は、砲艦カヤオ号のアメリカ人武官や水兵に指揮され、「星条旗と救済の御旗と中国国旗〔原文、the Chinese colors〕を翻しながら、飢饉の地へむけて珠江を遡上したのである」⁽⁵²⁾。

「この大規模な遠征隊は二部〔原文、two sections〕で進行し」、カヤオ号は大量の食糧をもつとせず、ランチやジャンク船を内陸まで送り届けた。『クリスチャン・ヘラルド』誌に掲載されたマクウエイドの電文は救済遠征隊の素晴らしい物語を読者に伝えており、「それは人道主義的な奉仕の歴史に類を見ない物語なのである」。今後、珠江や西

江沿いの村々に住む純朴な人々は「声を震わせ、涙を流しながら、偉大な軍艦と見慣れない小規模な船団がどのように彼等を餓死から救い出したかを子どもたちに語るだろう」とも予見している。そして、社説は寄付金が事業を成功に導く一手段となったと付け加えた。最後に、今回の救済活動が広西省で何千人もの命を救うことになったという総領事からの電信を紹介した上で、「私たちは中国での救済活動に「二重の恩恵」で報いた神の手の存在に気付かされるのである」との言葉で結ばれた。⁵³⁾

総じて言えば、『クリスチャン・ヘラルド』誌は、アメリカ国内の読者からの寄付金、広東省の総領事の遠征隊発足、そして広西省の宣教師たちによる現地での活動を通じて「人道主義的な奉仕」が成し遂げられ、この結果、中国におけるキリスト教伝道に利するという見通しを述べていた。

では、壬寅奇災に対する救済活動は、広西省のプロテスタント伝道にどのような影響を及ぼしたのか。オールドフィールドは、桂平県では「この時期の宣教師たちの活動は人々の心にあつた敵意を払拭し、飢饉が終わるまでには外国人宣教師たちは最も尊敬され、彼らによって命を救われた多くの人々に崇拜された」としたうえで、礼拝出席者が増加し被災した少年たちが改宗したとする。⁵⁴⁾ 羅腓力はこれに加えて平南県における礼拝堂建設と災害救済との因果関係を指摘している。⁵⁵⁾ 少なくとも、桂平県と平南県では宣教師たちの活動がキリスト教伝道を促進する影響を与えたことは間違いない。

ただし、遠征隊による壬寅奇災救済は、同時代におこなわれた救済活動のごく一部に過ぎなかったことは付言すべきであろう。王之春の呼びかけに応じた広東省の広仁善堂は、四月末から五月はじめの時点で、広東省の行政官

から提供された一万両で約二万ピクル(約二〇万キログラム)の米穀を購入し、すでに広西省に輸送していた。⁽⁵⁶⁾遠征隊の活動が本格化する以前に、広仁善堂は遠征隊が運搬した総量を上回る米穀を広西省にもたらしていたのである。また、王之春は、述善堂を右江一帯で、広仁善堂を左江一帯で活動させるように指示を出している。⁽⁵⁷⁾これが実行されたか否かは不明だが、広東の善堂の活動範囲は遠征隊よりも広範に及んでいたと考えられる。

それゆえ、広西の民衆たちが宣教師の来訪を必ずしも歓迎していたわけではない。救済活動の報告に見られる以下の記述はその一端を示している。七月一三日に発生した桂平県での事故を教訓として、新たな配給手段が考案された。それは、地域社会の郷紳に被災者の名簿を作成させ、それに応じて紳士たちに米穀を一括して提供し、救済活動を代行させるという方法だった。しかし、群衆が郷紳のもとに殺到して事故を誘発する危険性があつたうえに、郷紳自身による配給物資の詐取や一族に対するえこひいきのために、物資が行き渡らないことが懸念された。そのため、最終的には中国語を解する外国人宣教師が中国人信者とともに鄉村地域を戸別訪問し、配給所で通用する引換券を配布すると同時に、直接物資を提供したという。しかし、この方法は郷紳の反感を買い、宣教師に対する「極的な対策」がとられたとする。⁽⁵⁸⁾

「対策」の具体的な事例は不明であるが、少なくともこの事例は、たとえ災害救済という名目であっても、宣教師が地域社会に直接足を踏み入れることの難しさを物語っている。善堂が行った救済活動は地域社会の有力者たちの協力のもとで行われていたはずであり、キリスト教伝道団体を含むアメリカの救済活動を受け付けなかった可能性も示唆できよう。

第7章 「人道主義的な奉仕」と岑春煊の西征

以上のとおり、広西における救済活動はアメリカ国内では「人道主義的な奉仕」と見なされ、広西省におけるキリスト教伝道にも一定程度の影響を及ぼすことができた。しかし、『クリスチャン・ヘラルド』誌の社説は「この大規模な遠征隊は二部〔原文、two sections〕で進行し」と述べており、第三次遠征隊については触れていない。本章では、救済活動と騒乱の関係を知る手がかりとして、第三次遠征隊の経緯に着目する。

第二次遠征隊による救済活動が行われていた七月初旬には、マクウエイドは六〇〇〇ピクル（約三六万キログラム）の米穀を桂平県經由で柳州府に運搬することを検討し、その責任者として柳州府に滞在していた宣道会宣教師のカニングハムを選出した。⁵⁹七月二五日に嶺南学堂の教員ルイスに率いられた遠征隊のメンバーと物資が桂平県に到着すると、その日の午後に会議が開かれた。しかし、翌日にカニングハムやルイスたちと面会した岑春煊は、軍事行動のために船舶が徴発されて輸送手段がなく、柳州府付近で軍隊が撤退しているため宣教師の身に危険が及ぶという二つの理由を挙げ、救済活動が難しいと示唆した。そこで、岑は宣教師たちに対して米穀を引き取り柳州に運搬すると提案したのである。ルイスはマクウエイドの同意を得た上で、八月三日に岑に米穀を提供し、受領書を受け取った後に広州府に戻った。⁶⁰これに対して遠征隊の報告書は「委員会はこの「第三次アメリカ救済遠征隊」がその目的地に到着するのを確認できないことと、米穀の配給を支援することができないことを大変残念に思う」としている。⁶¹

米穀が中国側に提供されたのは、広西省の騒乱を平定しようとする清朝中央の思惑と無関係ではない。一九〇三年四月、清朝中央は当時四川省に赴任していた岑春煊を兩広総督に任命した。清朝においては官僚の原籍回避が通例となっており、広西省出身の人物が兩広総督に就任したのは過去に一例存在するのみであった。⁽⁶²⁾この当時、沿海部では王之春が仏印当局に軍隊派遣を求めたことで騒乱の沈静化を図ろうとしているとの噂が流れ、上海では王之春罷免をもとめる抗議集会が行われていた。⁽⁶³⁾近年の研究ではこの派兵要請は事実無根と考えられているが、⁽⁶⁴⁾清朝中央が広西省出身の岑春煊を兩広総督に任命した背景には、騒乱に対する世論の高まりや国際関係をめぐる緊張があったといえる。

岑春煊は一九〇三年六月一九日に広州府に着任すると、同月二五日には三〇〇〇人あまりの兵士を率いて梧州府へ向かった。そして、同年九月二七日に広州府に戻るまでのおよそ三カ月間、広西省内で討伐作戦を指揮した。⁽⁶⁵⁾同時代の日刊紙や行政文書で「西征」と称されるこの遠征には、広東省と広西省を含む周辺八省から四万人以上の兵士が動員された。⁽⁶⁶⁾この間、岑春煊は潯州府と柳州府を中心に、兵士の休養と補充を行って匪賊討伐の効率化を図る一方で、「剿撫兼施」(掃討作戦と招撫工作の併用)を念頭に置いて鎮圧作戦を行った。⁽⁶⁸⁾このように、第二次・第三次遠征隊が派遣されたのと同時期に、岑春煊は広西省で軍事作戦を指揮していたのである。

資料によつては、岑春煊による騒乱鎮圧の残酷さが強調されてきた。たとえば、山西巡撫時代の岑と面識を持つた宣教師ティモシー・リチャードは、「些細な騒乱がどこで発生しようとも、彼は扇動者の即時処刑を命じ、どんな役人も命令に背くことはなかった。なぜなら、もし役人が(命令に)背けば同様の末路をたどることになるからで

あった」と回想している。⁽⁶⁹⁾ただし、「今回の西征はおおよそ飢饉の救済と反乱の招撫を主旨とし、過度の殺戮は忍びない」と岑が新聞記者に語ったとおり、西征は軍事作戦だけでなく、災害に対する救済活動も内包していたのである。⁽⁷⁰⁾

宣教師やマクウエイドは岑春煊のこうした立場を理解していたと考えられる。たとえば、フィーは、遠征隊の活動末期に「必要とされていたものは殺害や処刑を行う兵士ではなく、米穀だった。もしそれが実行され、より全般的に提供されていれば、反乱について語ることはほとんどなかったか、もしくはごく少ない程度だっただろう」と述べている。⁽⁷¹⁾ここからは中国の行政官に対する認識は見えてこないが、フィーは少なくとも飢饉と反乱との連関性を理解し、災害救済の重要性を認識していたことがわかる。マクウエイドも、「現時点において、飢饉に襲われ、混乱した地域において平和を回復する最善策は、まず人々に食糧を与え、招撫を行うことである」として、行政官たちに慈善家を保護するように命じた岑春煊の触れ書きを記録していることから、彼の考えを理解していたことは明らかである。⁽⁷²⁾

それゆえ、広西省の騒乱と飢饉を目の当たりにした宣教師や外交官は、救済活動を重視する岑春煊の立場を踏まえた上で救済用米穀の提供を行っていたと考えられよう。換言すれば、「人道主義的な奉仕」として語られる災害救済は、最終的に清朝中央による災害救済と騒乱平定を織り交ぜた西征に組み込まれたといえる。

第8章 騒乱の終結

アメリカの外交官や宣教師の反応は決して特殊なものではなかった。なぜなら、英領香港の行政官たちも岑春煊の西征に対してアメリカと同様の反応を示していたからである。たとえば、一九〇三年四月に香港総督のブレイクが発足させた「広西飢饉のための基金委員会」は、現地の宣教師に対して米穀や資金を提供していた。この基金委員会に対して、岑春煊は飢饉救済のために集められた基金の残額を送付するように依頼し、二回にわたって計六五〇〇香港ドルが提供された。⁽⁷⁵⁾この書簡を確認する限り、この基金は救済米の購入費用に充当されたか、義援金として被災者に配布された可能性がある。

中国在住の外国人たちは、「岑閣下は、広西のその地域〔柳州府〕で洪水と飢饉に苦しむ人々に配布するための米穀の他に、一三五万両を携えていた。その目的は、妥協できない人々には武力を利用し、帝国の恩寵に浴して農事に帰することを望む人々には親切心と救いを用いることであつた」と岑春煊の対応を報道していた。⁽⁷⁴⁾この文章から、外国人たちが岑の遠征に期待をかける様子⁽⁷⁵⁾がうかがえると同時に、第三次遠征隊から提供を受けた「米穀」を岑春煊が運搬していたことが推測できる。

しかし、鎮圧作戦、招撫工作、そして災害救済を織り交ぜた西征が、騒乱の終息に結びついたわけではない。なぜなら、招撫に応じた陸亜発の武装蜂起が再び事態を悪化させたからである。陸亜発の経歴についてははっきりしないが、会党の首領もしくは宣化県出身で蘇元春の部下だったとされている。彼は東蘭州城を陥落させるなど活動

を活性化させていたが、一九〇三年九月二日ごろに融水県で柳州知府祖繩武の招撫に応じた。しかし、投降した会党や游勇が密かに処刑されていると知った陸は身の危険を察知し、一九〇四年六月二四日に柳州城内の行政施設に攻撃を加えた。⁽⁷⁶⁾ 数日後、会党や游勇を糾合した蜂起軍は柳州城を出発し、三方面に分かれた。陸亜発らは柳州府と桂林府の間に位置する山岳地帯に、黄慶揚（蜂起軍に寝返った軍人）らは北上して広西・貴州の省境に位置する梅寨司に、そして褚大・欧四（会党の首領）らは西北に進んで思恩県周辺に立てこもった。⁽⁷⁷⁾

岑春煊はすぐさま三万人あまりの兵士を動員して鎮圧作戦を実行した。その結果、一九〇四年一二月には陸亜発は桂林で処刑され、翌年二月には黄慶揚は融県で戦死、残る褚大・欧四は政府軍と数回にわたって戦鬪を繰り広げるが、最終的には貴州省との省境で包囲され、一二月頃に死亡する。翌年二月にはその残党も貴州省都匀府で殲滅された。⁽⁷⁸⁾ 結局、岑春煊が広西省での鎮圧作戦終了を清朝中央に報告したのは一九〇五年一〇月のことであった。⁽⁷⁹⁾

以上の経緯を踏まえれば、第三次遠征隊の米穀を用いて行われた柳州付近の救済活動や招撫工作を背景として、陸亜発の帰順を招いたと解釈することは可能であろう。しかし、陸亜発の武装蜂起にみられるように、それらの活動によって騒乱が芽を摘まれたわけではなかった。

おわりに

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて発生した広西省の騒乱は、中越边界会巡章程の締結に起因する。広西辺防督辦の蘇元春は、仏印から広西省へ戻ってきた会党や游勇を帰順させたが、国境付近の治安悪化に歯止めがかから

なかった。さらに、彼の湖北総督異動に伴う大量の兵士除隊が、南寧で発生したような反政府暴動を引き起こした。

こうしたなか、一九〇一年から一九〇三年にかけて壬寅奇災が広西省を襲った。治安悪化のさなかにあつて、被災者が騒乱の一団に加わるのではないかという行政官たちの危惧は当然の成り行きといえる。一方、宣教師たちの救済活動や行政官の「荒政」は、被災地域が広範囲にわたったゆえに十分な成果を収めることができなかつた。それゆえ、宣教師も巡撫の王之春も広東省や香港に支援を要請せざるを得なくなつた。

在広州アメリカ総領事のマクウエイドは宣教師から報告を受け、アメリカ国内にむけて飢饉救済を訴えた。これに応じた『クリスチャン・ヘラルド』誌は募金活動を主導し、寄付金を広州の総領事館に送付した。マクウエイドのもとには総額六万二五三二元九九毫の寄付金が寄せられ、三度にわたるアメリカ救済遠征隊の活動を可能にした。本稿で得られた知見に基づけば、この遠征隊の活動は二つの結果をもたらした。

一つは、『クリスチャン・ヘラルド』誌が称賛するように（また、先行研究でも指摘されているとおり）、救済活動が後年の宣道会による伝道活動の基礎を形成したことである。ティモシー・リチャードは、一八七〇年代の丁戊奇荒の被災地である山西省に向かう際、「中国の内陸部の門戸を開くことは神による直接的な導きだと確信した⁽⁸⁰⁾」。こうした心情は、それぞれの時代で災害救済に従事する宣教師や中国人信者たちに共通していたと考えられる。ただし、本稿はそうした見解に同意しつつも、遠征隊を通じて伝道活動を行おうとする宣教師に対する各種の制約が存在していた事実も明らかにした。

もう一つは、騒乱鎮圧に及ぼした影響である。本稿では、三回目の遠征隊が運搬した米穀が岑春煊に提供された

ことに着目した。現地に滞在していた宣教師やマクウエイドは、岑春煊が行う西征の性格を理解した上で米穀を提
供し、岑はこの米穀を用いて被災者救済や帰順工作を行いつつ騒乱平定を試みたと解釈される。もちろん、遠征隊
の米穀を部分的に用いた西征が騒乱を終息させたわけではなかった。しかし、「人道主義的な奉仕」のもとで行われ
たアメリカの救済援助は、岑春煊の介在を通じて、騒乱平定の一環として行われた招撫工作や救済活動に組み込ま
れていったことは間違いない。

過去の事例を繕えば、丁戊奇荒において外国人の寄付金が、中国の行政官を経由して被災民に配布された事実を
確認できる。⁽⁸¹⁾しかし、本稿で得られた知見に基づけば、宣教師たちから米穀を受領した岑春煊が、災害救済と軍事
作戦を行っていたことは注目に値する。すなわち、丁戊奇荒を画期として中国各地で展開された国際的な救済活動
を如実に観察すれば、為政者の介入を通じてその活動の性質が変化していった事例が他にも確認できると予想され
る。本稿で提示した事例が他地域にも該当するか、比較検討の必要性はある。ただし、災害救済や地域社会に関す
る研究において、こうした論点が意識的に検討される余地があることは間違いないだろう。

註

- (1) 来新夏「試論清光緒末年的広西人民大起義」『歴史研
究』一九五七年、五七―七七頁。広東省中山図書館編『一
九〇三年―一九〇五年 広西人民起義資料』第一冊―第三
冊、出版地不明・広東省中山図書館、一九六〇年。日本国

内では、前田勝太郎が清末の広東省における民衆闘争が広
西省の会党反乱に呼応して発生したという文脈で、この騒
乱を紹介している(同「辛亥革命前の広東における民衆闘
争…農民を主体として」『歴史学研究』第四二三号、一九七
五年八月、一―一六頁)。

(2) 林宝航「広西的『游勇』」中国人民政治協商會議広西僑族自治区委員会文史資料研究委員会編『広西文史資料選輯』第二輯、南寧：出版者不明、一九六二年、一七〇—二〇〇頁。

(3) 徐舸「試論清末広西天地会重新崛起的原因」『広西師範大学学報（哲学社会科学版）』一九八九年第四期、五六—六三頁。同『清末広西天地会風雲録』桂林：広西師範大学出版社、一九九〇年。

(4) 羅腓力編著『宣道与中華：宣道会早期在華宣教史略』香港：宣道出版社、一九九七年。梁家麟編『華人宣道会百年史』香港：建道神学院、一九九八年。黄彩蓮『福音在南陲：浸信会与宣道会在広西的传教与事工（一八六二—一九四五）』香港：浸信会出版社（國際）有限公司、二〇一四年。W. H. Oldfield, *Pioneering in Kwangsi: The Story of Alliance Missions in South China*, Harrisburg: Christian Publications, [1936], Martha L. Charles Pepper, *All the Way to China: The story of Isaac L. Hess and his Landis cousins who went to South China as pioneer missionaries in the 1890s*, Morgantown: Mashof Press, 2007. これ以外に、林證耶による宣教師ジャフレイの伝記（同『翟輔民伝』香港：宣道会出版社、一九六二年）が確認されるが、本稿執筆段階では參

照できなかった。

(5) 羅やオールドフィールドは柳州伝道が始まる前のエピソードとして同地域の騒乱に言及しているが、これらを例外として既存の研究では同時期の騒乱についてほとんど言及していない（羅腓力、前掲書、一二五頁。Oldfield, op. cit., pp. 133-135）。

(6) 朱法源『從變乱到軍省：広西の初期近代化 一八六〇—一九三七』台北：中央研究院近代史研究所、一九九五年、一四七—一四八頁。清と阮朝ベトナムの境界を往来する匪賊については、望月直人やデービスが示唆に富む研究を進めているが、本稿では清仏戦争以後の経緯のみを取り上げる（望月直人「境界と匪賊：一九世紀中国・ベトナム間における「越境」と清朝—阮朝関係」『東洋史研究』第七七巻 第二号、二〇一八年九月、二七一—六一頁。Bradley Camp Davis, *Imperial Bandits: Outlaws and Rebels in the China-Vietnam Borderlands*, Seattle: University of Washington Press, 2017, pp. 73-76）。清仏戦争後の国境策定の経緯については望月直人が解説を加えている（同「清仏戦争と国境策定：東南アジアをめぐる国際政治」岡本隆司・箱田恵子編『インドブック近代中国外交史：明清交替から満洲事変まで』ミネルヴァ書房、二〇一九年、一〇四—一〇九頁）。

- (7) 黄嘉謨「清季の広西辺防(二)」『広西文献』第八三期、一九九九年、四一―五頁。
- (8) 林宝航「広西的『游勇』」前掲書、一七〇頁。
- (9) 徐舸、前掲書、一五一―一七頁。
- (10) 民国二十六年刊『邕寧県志』、兵事志、成文出版社、一九七五年、一四八頁。
- (11) 徐舸、前掲書、二二一―三〇頁。
- (12) 徐舸、前掲書、三四―三六頁。
- (13) 徐舸、前掲書、二二―二三頁。
- (14) 余一清「南寧地区人民の反清闘争」中国人民政治協商會議広西僮族自治区委員会文史資料研究委員会編、前掲書、二二五―二二六頁。
- (15) "McWade to David J. Hill," April 17th, 1902, *DUSCC*, Vol. 19, pp. 209-210. 本史料は程煥文編『美国駐中国広州領事館領事報告(一七九〇―一九〇六)』(桂林・広西師範大学出版社、二〇〇七年)所収の外交文書である。以下、註では英語標題 *Dispatches from U. S. Consuls in Canton, China, 1790-1906* を *DUSCC* と表記する。
- (16) "McWade to Conger," March 18, 1902, *Papers relating to the Foreign Relations of the United States*, Washington: Government Printing Office, 1903, p. 165.
- (17) 余一清、前掲論文、二二七―二二八頁。
- (18) "the Foreign Office to Mr. Conger," March 1, 1902, *Papers relating to the Foreign Relations of the United States*, op. cit., pp. 163-164.
- (19) "J. F. Fee to R. M. McWade," August 14th, 1903, *DUSCC*, Vol. 21, pp. 88-89.
- (20) *Ibid.*
- (21) 民国二十三年刊『貴県志』卷十八、「雜記」の項、成文出版社、一九六七年、五八五頁。
- (22) 『邕寧県志』、「兵事志」の項、一八五頁。
- (23) 民国二十九年刊『柳城県志』成文出版社、一九六七年、一四頁。
- (24) "R. M. McWade to Francis B. Loomis," May 12th, 1903, *DUSCC*, Vol. 20, pp. 266-269.
- (25) 『貴県志』卷十八、「雜記」の項。広西省の自然災害について概説した頼莉雲は、日刊紙『嶺東日報』に依拠して一九〇二年からの二年間で約七万三〇〇〇人が餓死したとす。しかし、記事の出典が明示されていないため本稿では参考にとどめる(同「晚清広西的自然災害及賑災政策」『広西民族大学学报(哲学社会科学版)』二〇〇六年S2期、六一―六五頁)。

- (26) 徐舸、前掲書、三九頁。
- (27) 「広西巡撫王之春再陳急借洋款電(光緒二十九年五月初三日)」、庾裕良・陳仁華等編『広西会党資料彙編』南寧：広西人民出版社、一九八九年、四四三―四四四頁。
- (28) W. H. Oldfield, op. cit., pp. 69-71.
- (29) "Alliance Missions China," *The Christian and Missionary Alliance*, September 5, 1903, p. 190. 本稿執筆にあたり、宣道会のホームページで無料の会員登録を行い、本資料をダウンロード・閲覧した (<http://www.cmalliance.org/resources/archives/alliance-magazine>)。最終閲覧日 二〇一〇年五月三〇日。
- (30) Mrs John E. Fee, "Famine in Kwang Si," *ibid.*, May 16, pp. 266, 278.
- (31) "How our Relief was welcomed in Kwang-Si," *Christian Herald*, September 23, 1903, p. 794.
- (32) "Alliance Missions China," *The Christian and Missionary Alliance*, September 26, 1903, p. 233.
- (33) Bella G. Fee, "Famine," *ibid.*, August 29, 1903, p. 177. Peppet, op. cit., pp. 103-104.
- (34) 「広西肅清」『香港華字日報』一九〇三年九月一四日。王之春がおこなった「荒政」は、一八七〇年代の丁戊奇荒において山東・山西両省の地方官が行ったそれとほぼ同じ内容だったと思われる(高橋孝助『飢饉と救済の社会史』青木書店、二〇〇六年、一七二―一八四頁)。なお、壬寅奇災を主題としてはいないものの、広西省の都市部における災害救済については侯宜傑が示唆に富む研究を行っていることを付言したい(同『歴史語境下の人文關懷：清代広西城市賑災活動評析』『河池学院学报』二〇一〇年第六期、六六一―六九九頁)。
- (35) 「電請籌賑」『香港華字日報』一九〇三年四月二日。
- (36) 史紅帥「一九〇一年陝西大旱災中的西人賑濟活動研究」『唐都學刊』第二六卷第五期、二〇一〇年九月、一六一―二二頁。
- (37) 史紅帥、前掲論文、一七一―一八頁。
- (38) 史紅帥、前掲論文、一九―二二頁。これ以外に、一九〇六年に江蘇省北部で発生した水害に対して、アメリカが議会を通じて義援金を拠出していた事例を確認できる(堀地明『明清食料騷擾研究』汲古書院、二〇一一年、五〇九頁)。
- (39) "Selling Their Children for Bread," *Christian Herald*, June 10, 1903, p. 498. "How our Famine Flotilla Saved Kwang Si," *Christian Herald*, September 9, 1903, pp. 751, 758.
- (40) Henrietta Harrison, "A Penny for the Little Chinese": The

- French Holy Childhood Association in China, 1843-1951," *The American Historical Review*, Vol. 113, No. 1, February 2008, p. 75. ハリソンの議論は拙著『華南中国の近代とキリスト教』（東京大学出版会、二〇一七年、第四章）でも紹介した。
- (41) "The Kwang Si Famine," *DUSCC*, Vol. 21, p. 501. なお、この会計報告では『クリスチャン・ヘラルド』誌が六月六日に送付した寄付金約一万美元に、アメリカ人の個人名義の寄付金二件（一八米ドル）が加えられた上で銀元に換算されている。
- (42) 遠征隊に参加した外国人スタッフの名簿は確認できなかったため、参加者の所属組織は *DUSCC* (Vol. 20, p. 301, and Vol. 21, pp. 61, 97) などから確認した。
- (43) "Chinese Welcome our Relief Fleet," *Christian Herald*, July 22, p. 610. この記事では、出発日時を「四月一六日」としているが、「五月一六日」の誤りと考えられる ("U. S. S. Callao to McWade," May 17th, 1903, *DUSCC*, Vol. 20, p. 321.)。
- (44) "How Famine Florida Saved Kwang-Si," op. cit., pp. 751, 758.
- (45) "Report concerning second Kwangsi famine relief expedition," *DUSCC*, Vol. 21, pp. 53-55. 第二次遠征隊の出発日は別の報告より確認した ("Paul Todd to McWade," July 24th, 1903, *ibid.*, p. 60.)。
- (46) Clancey Lewis et al., "Report of the Third American Relief Expedition to Kwang Si," *DUSCC*, Vol. 21, August 22, 1903, pp. 91-93, 1903.
- (47) "McWade to the Subscribers," April 12th, 1904, *DUSCC*, Vol. 21, p. 452.
- (48) Clancey Lewis et al., "Report of the Third American Relief Expedition to Kwang Si," op. cit., p. 94.
- (49) "Chinese Welcome our Relief Fleet," op. cit.
- (50) "Paul Todd to McWade," op. cit., p. 61.
- (51) 第三次遠征隊を指揮したルイスは、救済活動初期の段階では「五カティ（約三〇〇グラム）もしくは一〇カティ（約六〇〇グラム）の米穀が（配給所の）門前でチケットを受け取った全ての人に」配布されたと報告しているが、実際はそれを下回る配給量だったと考えられる (Clancey Lewis et al., "Report of the Third American Relief Expedition to Kwang Si," op. cit., p. 94.)。
- (52) "A Glorious Relief Work," *Christian Herald*, September 9, 1903, p. 752. 小野寺史郎の研究に依拠すれば、一八六二年に官船の識別用として清朝に採用された「黄龍旗」は、義和団事件以降の中国社会で各種儀礼に際して掲揚されるよう

- になつていたものの、王朝の旗という一般認識が強かつたところ。この議論を踏まえれば、引用文にある「中国国旗」は「黄龍旗」であつた可能性が高い(同『国旗・国歌・国慶：ナショナルリズムとシンボルの中国近代史』東京大学出版会、二〇一一年、第一章)。
- (53) *Ibid.*, p. 752.
- (54) Oldfield, *op. cit.*, pp. 93-94. 黄彩蓮(カウ)のエンボードに言及している(前掲書、九二頁)。
- (55) 羅腓力、前掲書、一二二頁。
- (56) Anonymous, *Report of Work done by the Kwangsi Famine Relief Fund, Hongkong*: n. p., 1903, p. 20. 本資料は東洋文庫オンライン(ン)に所蔵されている(請求記号: 東 P-II-c-320)。
- (57) 「善於賑濟」『香港華字日報』一九〇三年五月二五日。
- (58) Clancey Lewis et al., "Report of the Third American Relief Expedition to Kwang Si," *op. cit.*, pp. 94-97.
- (59) "McWade to Loomis," July 16, 1903, *DUSCC*, Vol. 21, pp. 25-27.
- (60) Clancey Lewis et al., "Report of the Third American Relief Expedition to Kwang Si," *op. cit.*, pp. 91-93.
- (61) *Ibid.*, p. 93.
- (62) 岑春煊『樂齋漫筆』台北: 文星書店、一九六二年(初版一九四三年)、一一頁。"McWade to Loomis," April 21st, 1903, *DUSCC*, Vol. 20, pp. 190-192.
- (63) "McWade to Loomis," May 5th, 1903, *DUSCC*, Vol. 20, p. 253.
- (64) 肖宗志「拒法運動原因の真相与王之春被劾之由考論」『南華大学学報(社会科学版)』第一二卷第五期、二〇一一年一〇月、五九頁。
- (65) "James Scott to Walter Townley," June 30, 1903, F. O. 17 / 1608, No. 182 to 183; "James Scott to Ernest Satow," October 24, 1903, F. O. 17 / 1608, No. 304.
- (66) "McWade to Francis B. Loomis," September 24, 1903, *DUSCC*, Vol. 21, p. 128.
- (67) 「署兩広総督岑春煊奏広西剿辦各股会党情形折(光緒二十九年九月初八日(宮中朱批奏折))」中国第一歴史檔案館・北京師範大学歴史系編『辛亥革命前十年間民変檔案史料(下册)』北京: 中華書局、一九八五年、五五二—五五三頁(以下、註では『民変檔案(下册)』と表記する)。
- (68) 林宝航、前掲論文、一九三一—一九七頁。岑春煊、前掲書、一一頁。
- (69) Timothy Richard, *Forty-Five Years in China*, London: T.

Fisher Urwin, 1916, p. 308. 本回想録は、著者も参加した共同訳としてまもなく刊行される予定であるが、本稿の引用箇所は著者が英語原文より直訳した。

(70) 「帥轅籌筆」『香港華字日報』一九〇三年七月二三日。

(71) “Tragic Scenes in Chinese Relief Work,” *Christian Herald*, October 28, 1903, p. 909.

(72) “Proclamation (included in the dispatch from McWade to Loomis, July 23rd, 1903)” *DUSCC*, Vol. 21, p. 34.

(73) Anonymous, *Report of Work done by the Kwangsi Famine Relief Fund*, op. cit., pp. 6, 37.

(74) “The Crisis in Kwangsi,” *Chinese Recorder*, August 1903, p. 421.

(75) 岑春煊が第三次遠征隊の米穀をどのように利用したか、具体的な記録を確認することはできなかった。ただ、見逃してはならないのは、善堂の関係者が游勇に投降を呼びかけていたことである。「帥轅籌筆」『香港華字日報』一九〇三年八月二七日。柳州付近では一九〇三年の秋もしくは冬に匪賊黄飛鳳ら約三〇〇人が、「救済物資を配給していた〔放賑〕」述善堂の紳士を介して柳州知府に帰順を申し出ていた（署両広總督岑春煊奏遵旨酌保辦理柳慶剿撫宜出力各員折（光緒三〇年正月初八日〔宮中朱批奏折〕）『民變檔案

（下冊）、五六五頁）。こうした断片的な事実から、岑春煊は遠征隊の米穀を善堂に提供し、招撫工作や救済活動を行わせていたのではないかとの推測も可能であろう。

(76) 龍月卿「陸軍發柳州起義見聞」『廣西文史資料選輯』第二輯、二〇一—二〇二頁。龍は陸軍發を蘇元春の部下と、徐炯は会党の首領と指摘している（徐炯、前掲書、八九頁）。

(77) 徐炯、前掲書、九五—九六頁。

(78) 徐炯、前掲書、九六—九八頁。

(79) 「署兩広總督岑春煊奏広西全省一律肅清折（光緒三十一年九月初一日）」『民變檔案（下冊）』、六〇四—六〇七頁。拙稿「ミッション史料からみる珠江デルタ流域の地域社会」〔『東洋史研究』第七五卷第三号、二〇一六年二月、一三七—一六八頁〕では陸の蜂起と広東省内の治安悪化についてわずかに触れた。

(80) Timothy Richard, op. cit., p. 125.

(81) *Ibid.*, pp. 104, 142.

（同志社大学文学部助教）

付記：本研究はJSPS科研費17K17667の助成を受けたものである。

広西省における壬寅奇災とアメリカ救済遠征隊 土肥

THE TOYO GAKUHO

Vol. 102, No. 1 - June 2020

(THE JOURNAL OF THE RESEARCH DEPARTMENT
OF THE TOYO BUNKO)

Renyin Disaster (1901–1903) in Guangxi Province and
the “American Relief Expedition”

Doi Ayumu

The civil disturbances caused by secret societies and discharged military veterans of Guangxi Province from the end of the 19th century into the beginning of the 20th century were further exacerbated by natural disasters, especially the flood and famine from 1901 to 1903. Although much research has paid special attention to these Guangxi civil disturbances to date, the aspect of relief efforts by foreign Protestant missionary societies has not been sufficiently covered. For this reason, the present article attempts to clarify whether or not the disaster relief activities, which were carried out by the Christian and Missionary Alliance (CMA) in Guangxi Province, and by Robert McWade, a Consul General of the United States at Guangzhou, affected the civil disturbances.

The author begins by summarizing the actual conditions surrounding the disturbances based on the research to date and the available primary sources, in order to confirm a relationship between civil disturbances and the Renyin Disasters. Next, he describes the famine relief efforts conducted in 1903 by the missionaries of the CMA and McWade’s “American Relief Expedition” funded by private voluntary contributions from the United States; then sums up the influence exerted by relief efforts on the evangelical activities of the CMA in Guangxi Province, in general, while focusing specifically on the relationship between famine relief, touted as “humanitarian service” in the US, and the simultaneous efforts by the Cen Chunxuan, the Viceroy of Liangguang to suppress rebellion.

The above investigation has led the author to the following two discov-

eries. First, regarding the relationship between disaster relief and Protestant evangelical activities, as already shown in the existing research, the contribution of the humanitarian efforts carried out by the missionaries of the CMA and diplomats in the midst of the Renyin Disasters can be confirmed. On the other hand, it is also clear that the evangelical efforts conducted by McWade's "Expedition" met with every possible impediment because of the oppositions on the part of local elites. Secondly, due to the intervention of Chinese authorities, the relief campaign was incorporated into the counterinsurgency operations. In more general terms, the author's results demonstrate the necessity of further studying the relationships between internationally organized relief campaigns and intervention in such efforts by Chinese local authorities.

The Greater East Asia Co-Prosperity Sphere and Manchukuo's Foreign Policy

HIGUCHI Hidemi

This article is an attempt to elucidate the kind of Manchukuo's diplomacy with other Asian states, in order to analyze its national character and the structure of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere (GEACPS). While diplomacy normally helps a state establish its *raison d'état*, by enabling it to define its national character through participation in the international community and sharing values and interests with other members, as a "puppet state" of the Japanese Empire, Manchukuo differed in that respect, since it was largely dominated by diplomatic relations with Japan, which were at times in conflict with the principles of the GEACPS community, thus threatening to add a layer of complexity to its national character.

On the other hand, Manchukuo was for Japan a model state for building the GEACPS, whereas the other countries in the Sphere sought independence and sovereignty, urging Manchukuo to also pursue equal diplomatic relations with Japan as a sovereign state. Consequently, as Japan expanded its influence in developing the "New Order of East Asia" into the GEACPS and the number of member countries increased, Manchukuo relinquished its role as a model polity and came to be recognized as an independent sovereign state.